

『#ソウルの春』(2023年)は、キム・ソンス監督作品。amazon prime videoで鑑賞した。『#ソウルの春』とは1979年10月26日朴正熙暗殺事件以降に韓国で一時的に勃興した民主化ムードを指す言葉だそう(チェコスロバキアの「プラハの春」に由来する)。本作では『#ソウルの春』自体は簡潔に触れられるだけであり、むしろそれが頓挫する要因となった粛軍クーデターを主軸に描いている。

1979年10月26日朴正熙暗殺事件発生を、臨時で集められた陸軍の将官たちに知らされ、国連保安司令官の全斗煥(チョン・ドゥグァン少将:D)を暗殺事件の合同捜査本部長に任命した。軍内部では総長とDの対立が表面化し始める。権力欲が強いDは軍内で無視できない勢力を有する秘密組織「ハナ会」のリーダーでもあり、保安司令部や合同捜査本部の権限を活用して権勢を思うままに振るっていた。それを快く思わない総長は、高潔な軍人として知られる陸軍本部人事参謀部次長のイ・テシン少将(T)に、軍内要職の一つである首都警備司令官への就任を要請する。当初これを断ったが、度重なる要請に遂に応じ、首都警備司令官に就任する。

総長とDの対立はますます深まり、総長はDを軍内部の人事で更迭し、合わせてハナ会を粛清しようと試みる。その動きに先手を打って総長を排除し、軍の実権を掌握することを決意。さらにはハナ会の後援者たちも仲間に加え、クーデター計画を企て始めた。

そして12月12日、Dはクーデターを開始。保安司令部人事処長でハナ会メンバーの大佐を逮捕して保安司令部に連行する。それと並行する形でDは大統領に就任した国務総理から総長逮捕同意書の決裁を取ろうと試みるが、大統領は国防部長官の決裁が必要であるとしてこれを退けた。そして肝心の長官は行方知れずになっていた。

その後、反乱軍の指揮者Dと防衛軍の指揮者Tの凄まじい戦いが始まる。それぞれの陣営が空挺旅団をソウルに出動させるよう情報戦が起こる。ソウル手前で各旅団は上層部の命令で、行ったり来たりを繰り返す。無能な上官の判断によって、優劣が大きく左右されてしまう。どこの世界にも無能の上司は多いのだ。最終的に追い詰められたTは手持ちの100人ほどの部隊と数台の戦車、そしてソウルを狙える郊外にいる野戦砲兵団を使い、単独でDの逮捕に向かった。バリケードによる阻止線が張られた警備団近傍にて、TとDは対峙することとなる。防衛軍は反乱軍のソウル突入(クーデター)を防ぐことができるのか。観客

は手に汗を握る。

映画に含まれない、その後

クーデター首謀者全斗煥に対しては独裁者・虐殺者、在任中の汚職などのイメージで見られることが多い。その反面、経済発展やオリンピック誘致・スポーツ振興などの功績がある。大統領退任後は隠遁生活を送った。その後も光州事件（1980年の全羅南道光州市で発生した民主化運動と弾圧の事件）に関する内乱罪や不正蓄財疑惑への追及が止まず、拘束され、内乱罪で死刑判決を受けた。減刑の後、釈放された。2013年、いわゆる「全斗煥追徴法」が成立し、時効を延長、一族の不正蓄財に対する強制捜査が行われた。2020年11月30日、光州地裁は全斗煥に対し懲役8ヵ月、執行猶予2年を言い渡した。2021年11月23日、自宅で死去した。

日本のクーデター

1936年2月26日に発生した陸軍の青年将校によるクーデター事件（武力による国内改革）、二・二六事件が有名である。（これに先立つ1932年の五・一五事件で若い海軍士官が犬養毅首相を暗殺した上に、各地を襲撃した。この事件は、将来クーデターを試みる際には、兵力を利用する必要があることを陸軍の青年士官たちに認識させた）。陸軍の皇道派青年将校らが、首相官邸や警視庁などを襲撃。高橋是清蔵相らが殺害され、鈴木貫太郎侍従長が重傷を負った。27日には東京市に戒厳令が布かれ、29日に青年将校らは反乱軍として鎮圧された（3日後に拘束）。反乱将校及び彼らに思想的影響を与えた北一輝・西田税は死刑となった。これをもってクーデターを目指す勢力は陸軍内から一掃された。皇道派などの将官多数が予備役に編入され、統制派が実権を握った。

二・二六事件を扱った映画は多数ある（未鑑賞）。